

# 宿場のあるまちの

# 地元学



自らの活動を通して文化を伝承し、活躍の場を広めている実践者がいます。その声を聞き、私たちが創る未来の歴史のあり方を、一緒に考えてみませんか。

## 過去 / 開拓者

### 島田と東海道の文化

江戸時代に栄えた

宿場町と川越しの文化が存在します

**東**海道の一部の河川は、架橋が禁止され、渡河をする人は、「川越人足」が担ぐ輦台や徒歩渡しなどで「川越し」を行いました。大井川は「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と詠まれたほどの難所。旅人は、大雨などの増水で川の水深が4尺5寸（約1m40cm）以上になると、川越しが禁止されると、「川留め」にあり、島田宿や金谷宿などの宿場に滞在を余儀なくされました。そのため、宿場町は人々で賑わい、繁栄がもたらされる

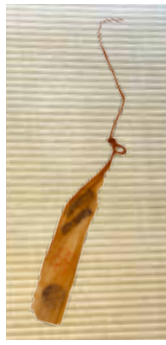
**近**世の東海道は、天正18年（1590）に、徳川家康が交通路を整備したことから始まります。慶長6年（1601）には、それまで京都から鎌倉・小田原までだった街道が、江戸まで延長されました。日本橋（江戸）から三条大橋（京都）までの間に、53の宿場「東海道五十三次」が結ばれ、人や物資を馬で運ぶ伝馬制度が定められました。やがて多くの旅人が往来するようになり、さまざまな出版物も作られるなど、人々の見聞が広がっていきました。

ここにある文化を学び、生活に生かす「地元学」。現在の島田市には、その実践者が多くいます。その声からは、郷土愛を持って活動することで、文化を伝承し、より明るい未来の歴史を作る姿が見えます。

ようになったのです。元禄9年（1696）には、川越しを仕切る川庄屋などの組織や川会所、番宿などの建物が整備され、川越制度が確立。その当時の大井川の川越人足は、兩岸あわせて300人以上いたとされています。

**島**田市内には、「島田宿」と「金谷宿」がありました。また、「間の宿菊川」は、金谷宿と日坂宿の中間にあり、金谷宿で旅人の受け入れが困難となった際に、臨時の宿場として活用されていました。島田宿には家数約1500軒・旅籠約50軒、金谷宿には家数約1000軒・旅籠約50軒があったとされ、旅籠の数からも、旅人で賑わっていたことが伺えます。川越制度は、江戸時代が終わり、明治3年（1870）に架橋・渡船の禁が解かれるまで続きました。





## 現在 / 伝承者

### 川越遺跡の文化

今も残る民俗文化財

伝承している人々を紹介し

# 川越遺跡の文化

400年以上続く  
川越し文化の伝承を未来へ

#### 【川越しへの熱意】

大井川輦台越保存会は、昭和42年に発足しました。昭和61年の第1回総会時の会員は約80人。その後、伝承や輦台を担ぐ事業などの活動は、会員の有志によって行われてきたため、平成12年に、組織の見直しが行われ、会員約90人の新生保存会が発足します。その時から事務局長を務める松井英雄さんは「後世に伝えていくことが大切。川越遺跡も国の文化財にふさわしい復元が必要です」と保存と復元の重要性を語ります。また、長年観光ボランティアを続けている松井三宜さんは「伝承には、渡し場の良さを知ってもらおう普段の活動と、地元の人々の意識の高揚が大切です」と訴えます。

#### 【誇りに思う日本の宝】

輦台の担ぎ手となる「会員」備品の補修をする「資金」、語り部となる年配者でさえ川会所を寺と言うなどの「認識」の不足があります。これらの不足の原因の一つを「建物と文化が残っている日本一の宝ということに、住民が気付いていないのではないのでしょうか」と話す二人は、日本で唯一の川越しに関する国指定文化財「川越遺跡」に誇りをもって活動しています。

#### 【復元からのスタート】

昨年、市は史跡の保存管理の方針を示した計画を策定。二人は「イベントなども、400年以上の歴史と文化を伝える意思をもって行ってほしいです。また、川越遺跡は復元してからの始まりです」と未来志向の伝承とさらなる理解を目指します。



大井川輦台越保存会

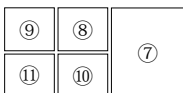
事務局長

松井英雄さん(右)(河原一丁目)

会員・観光ボランティア

松井三宜さん(左)(河原二丁目)





- ⑦ 札場の機織り機
- ⑧ 裂いた布を織り込んだ織物
- ⑨ 織物の元となる裂いた布
- ⑩ 裂き織りによるハンドバック
- ⑪ 裂き織りによる敷物



- ① 川会所
- ② 川越しをするために購入する川札
- ③ 身分が高い人が使用した大高欄鞆台
- ④ 川越人足のふんどし
- ⑤ 川越人足の法被
- ⑥ 川越人足の草鞋



川越遺跡の番宿「札場」

機織り体験講師  
内藤 雅巳 さん

☎ 島田市博物館 ☎ 37-1000

受け継いだ機織り  
文化と幸せを伝える

【「存続させたい生活文化」】

平成4年、島田市博物館の開館にあわせて、川越遺跡の番宿「札場」で民俗資料を使った「機織り体験」が始まりました。

体験は、使わなくなった布を裂いて機織り機で織り込む「裂き織り」の技法で行なわれます。平成15年から講師をしている内藤さんは「先人たちの生活文化と知恵から、役目を終えた古布を使った『ものづくり』の喜びを味わうことができます。それに、江戸情緒あふれる川越遺跡で機織り体験できることは、全国からみても貴重だと思えます。『継続は力なり』の精神で伝えていきたいと思えます」

【「これからの課題」】  
「人に教える、伝えることは大

変ですが、出会いや協力があって続けられています。いつかは、誰かに受け継いでほしいですね」と支えてくれる人たちへ感謝を忘れない内藤さん。しかし、受け継いでくれる担い手がいけないことが課題であるとも話します。

【「未来につなぐ幸せ」】

機織りは、古くから伝わってきた文化です。さらに、裂き織りには、役目を終えた布も新しく生まれ変わる魅力が加わります。「織らないと、どんな仕上がりになるかは分かりません。川越遺跡にも、訪ねてみないと分からない魅力がありますよ。体験から、新発見や喜びを味わえ新たな展開が生まれるはずですよ。体験者が、少しでもこの文化を未来に引き継いでいけば、自分のように幸せを感じる人が増えていくと思います」と話す笑顔からは、裂き織りへの深い愛情が伝わってきます。



— teach

のざき ちかこ  
野崎 千賀子 さん  
(金谷中町)

教授  
講座 / 香道・茶道

## 茶道の文化と知識を広める

**旧** 金谷町では、平成2年に発足した「まちづくり一〇〇人会議」など「東海道金谷宿」をテーマにまちづくりを進めていました。その流れをくんで、町民同士が教え、学び合う「東海道金谷宿大学」が平成5年に開講。新市になってからもみんなが協力して盛り上げています。

**茶** 道の教授を始めたのは、茶の生産が昔から盛んなのに、作法や楽しみ方がまだまだ知られていないと感じたからです。はじめは、茶道と抹茶のことをより多くの人に知ってもらおうと、ゆったりした腰掛けを使用した茶会を開きました。まずは、「ほっとする」時間を体験することにより、余裕もった生活を楽しんでほしいと思ったのです。

**地** 域の人が地域のことを教えるので気軽に参加でき、教授と学生がお互いを磨くこともできます。それは、講座を超えて広がっています。私も、教授から島田にある句碑や俳句を学び、宿場のことなど当時の風景や心情を知ることができました。人に尋ねたり、年上の人の意見を聞いたりすることが、見解を広め探究心を高めてくれるのです。金谷宿大学で知識を蓄えた学生に、次は教える側となり、地域の文化を伝え広げていってほしいです。

## 茶道



## 現在 / 継承者

東海道金谷宿大学

市民自らが「教え・学ぶ」文化  
教授と学生の声を聞く

# 東海道金谷宿大学

## 語り部

**金** 谷宿大学は、学ぶ人の「学ぶ喜びを感じたい」という希望を叶えます。また「地域のために手伝えたい」という教える人のボランティア精神と実践する力を育みます。これにより、地域の文化を地域住民全体で共有できる、新たな魅力につながってきました。  
**当** 初は私自身、金谷宿大学の学生でしたが、平成20年から教授として、地域のことをテーマに講座を開いています。きっかけは、かなや観光ボランティアの会の事務局長として、地元の課題を地元で解決して、新たな魅力を生み出したいと思ったからです。今年度のテーマは、国指定史跡「諏訪原城跡」でした。講座で学生と話すことは、ボランティア活動にも生かされ、新たな話題も生まれるので、互いに学び合えます。一方で、人が集まらない講座もあり、まだまだ地域に根付いていないと感じることもあります。地域を知る意欲を高めるためにも、若者や社会に合わせ変化する必要があります。  
**今** は、インターネットなどでたくさんの方に情報を一瞬で集められます。それは同時に、多くの不正確な情報も集まってくるという事です。私は語り部として、正しい歴史や文化を伝えていきたいと思っています。

## 語り部として地域のことを伝える

おおむら かずお

大村 和夫 さん  
(菊川)

教授  
講座 / 菊川を知ろう

— teach







learn

やまだ  
山田ひとみさん  
(旭一丁目)

学生  
講座／きもの着付け

和服を通じた出会いと自分磨き

**兵** 庫県から、11年前に島田市に移り住み

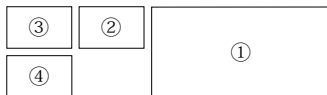
ました。祖母の影響で、子どもの頃から着物を着る機会が多くありました。島田には、和服の良さをあらためて実感できる帯まつりや鬘まつりの文化があったので、私も子どもに着物を着せてあげたいと思い、着付け教室に通い始めました。金谷宿大学は、その先生の紹介で3年前から受講しています。

**講** 座を通して、鬘まつりにも参加できま

予定をしています。講座は、広い年齢層の人と関わる事ができるし、その人が知っている技術や文化を教えてくれるので、自分を磨くことができます。スキルアップすることで、生活にも生かして、着物をより身近に感じることがができます。一方で、若い世代が着物の文化から離れてしまっていると感じます。若者にも帯まつりや鬘まつりなどに参加してもらい、ぜひ和服の良さを味わってほしいです。

**私** と同じ子育て世代の人は、子育て施設や事業などで情報入手しやすい環境にあると思います。大人が、子どもたちに和装を楽しむ機会を提供すれば、良さを知るきっかけになります。若者たちが魅力を感じれば、自ら発信する活動に結びつくと思います。

和服



- ① 金谷宿大学作品展示とおりがみ教室
- ② きもの着付け講座
- ③ 諏訪神社
- ④ 茶道講座の茶器

相互に学び魅力を高める

東海道金谷宿大学は、誰でも学び、教えることのできる事業として、金谷地区を中心に23年間続いています。教える「教授」と学ぶ「学生」は、創立時から参加している人も多くいます。経験豊富な学生が、いずれ地域で教える立場になってくれることを期待しています。

平成28年度からは、申し込みの簡略化、運営費の導入など、金谷宿大学の運営方法が変わります。特に、市内全域の社会教育施設を利用できるようになることで、どなたでも参加しやすくなります。多くの市民の皆さんに、学ぶ喜びや教える喜びを感じてほしいです。

参加者が、地域のために何かしたいという気持ちを育み、島田市の魅力を高めるきっかけになればと思っています。

すげもと こうへい 書記  
杉本 浩平

社会教育課  
社会教育係  
☎ 46-5625  
FAX 46-5302



金谷宿大学





たむらのうえん (農家)  
田村 善之 さん (川根町家山)



毎週土曜日の朝市(午前9時~正午)

農業を通じて  
人と場所を大切に

**東** 京でアパレル関係の  
サービスマスターをしてい  
ましたが、地元文化や自  
然、親の仕事である農業に  
魅力を感じたことから、就  
農を決めました。ちょうど  
その時、風情が残る川越街  
道に、江戸時代のような賑  
わいを創出したいという活  
動を知りました。そのこと  
に共感し、川越遺跡の番宿  
「荷縄屋」で農作物を販売  
する朝市を始めました。

も少なく苦労しました。次  
第に、「ここがきつかけで  
初めて川越街道に来たよ」  
という市内のお客さんも増  
え、今ではたくさんの人に  
支えられています。また、  
訪れた人には、ここの雰  
囲気や自慢のお茶と珍しい野  
菜などを知ってもらえたと  
思います。

**荷** 縄屋の朝市は、子ど  
もから大人まで楽し  
める商品を、農家自らが販  
売するという安心がありま  
す。私は、無農薬の地元産  
農作物が並ぶこの朝市と一  
緒に、この場所の情景を大  
切にし続けていきます。

## 未来 / 挑戦者

### 新たな取り組み

島田の文化を取り入れた活動  
実践者の声



菓子処叶家 (金谷東)  
中村 旬 さん (店長/伊太)

伝承された菓子の復元  
から地域の菓子へ

**江** 戸時代の「間の宿菊  
菓子」で東海道の名物  
菓子だった「餠餅」を昨  
年、新・金谷名物「家康公  
の勝鬨餅」として再現し  
ました。再現したきっかけ  
は、地域ならではの食文化  
が時代とともに減少してい  
くことを寂しく感じたから  
です。私自身、菓子の歴史  
文化を学ぶ機会が少なかっ  
たので、当時の材料の品質  
や様子を考えながら作るこ  
の取り組みは、貴重な体験  
だと感じました。再現後、



家康公の勝鬨餅(名物餠餅の復元)

販売や料理教室もしまし  
たが、まだまだ認知度が足  
りません。家でも作れる菓  
子なので、皆さんに知って  
もらう販売形態を確立し「地  
域のお菓子」にしていきたい  
です。

**伝** 承された文化の魅力  
を今も体感できることで  
す。これは菓子に限ったこ  
とではありません。その魅  
力を広めるためにも、地域  
でお互いに協力して挑戦し  
ていけたらと思います。さ  
まざまな角度で考えれば、  
可能性もより広がるはずで  
す。私も挑戦し続けます。

東海道の地元学が

つなげる人と未来





## 実

実践者に共通しているのは、郷土愛を持ち未来に文化を残す必要を感じていることです。市内に残る宿場町や生まれ育ったまちを「知る」ことは、古里とその文化への愛着の種になります。そして、このまちにある自分のルーツや懐かしく感じる情景と根付いている文化に対する親しみが、種を育み愛情を開花させます。だからこそ地元学に価値があるのではないのでしょうか。

一人でも多くの住民が、このまちの文化を知り、守り、伝え、さらなる魅力を創出できれば、人と文化の結び付きを生き、時代を超えて歴史を築いていけます。大事なのは、実践することです。地元学の実践者は、このまちの文化に愛情と生きがいを見いだし、過去から未来に歴史文化をつないでいます。同じまちに住む私たち一人一人が、新たな目標や慈しみを持って文化活動をすることで、豊かな心と共に生きていくことができます。地元学は、市民交流が活発なまちを築くのです。そして、私たちは、次代を担う子ども・若者が、生き生きとすることが出来る明るい未来の歴史を創るためにも、郷土愛を持って文化を伝承する必要があります。